

平成29年度 芦屋市立美術館特別展

「小杉武久 音楽のピクニック」



会 期	2017年12月9日(土)ー2018年2月12日(月・祝)
開館時間	午前10時ー午後5時(入館は午後4時30分まで)
会 場	芦屋市立美術館 エントランスホール、第1展示室、第2展示室
休 館 日	月曜日(ただし1/8,2/12は開館、1/9は休館)、年末年始(12/28-1/4)
観 覧 料	一般800(640)円、大高生500(400)円、中学生以下無料 ◇フリーパス:一般:1,200円/大高生:800円 *ご本人様に限り、会期中何度でも展覧会をご覧いただけるお得なパスポートです。 ※同時開催「昔のくらし」展の観覧料も含む ※()内は20名以上の団体料金 ※高齢者(65歳以上)および身体障がい者手帳・精神障がい者保健福祉手帳・療育手帳をお持ちの方ならびにその介護の方は各当日料金の半額になります。 ※観覧無料の日:2017年12月24日(日)、2018年1月8日(月・祝)

主 催	芦屋市立美術館
後 援	兵庫県、兵庫県教育委員会、公益財団法人兵庫県芸術文化協会、神戸新聞社、FM802
協 力	株式会社ゴードー
企画協力	岡本隆子(HEAR sound art library)、川崎弘二、藤本由紀夫

展示構成

本展示会は音楽家・小杉武久の活動の軌跡を、1950年代から現在までにわたって俯瞰的に捉えようとするものです。小杉は作曲家／演奏家として、約60年にわたる活動を行ってきています。その活動は当初よりヨーロッパの伝統音楽の継承ではなく、つねに既成の「音楽」という概念を拡張しようとするものでした。第1章から第4章までは小杉の多彩な活動のドキュメントとなるアーカイブ資料（記録写真／チラシ／ポスター／プログラムなど）の展示を行います。そして、第5章では小杉が1970年代以降に発表してきたオーディオ・ビジュアル作品を鑑賞するという構成となっております。

【出品作品数：約300点】

《第1章》

グループ・音楽から反音楽へ(1957~1965年)

音楽家・小杉武久は1938年に東京生まれ、1957年には東京芸術大学へ入学しています。小杉は音楽学部の楽理科において「音楽における即興性」の研究に取り組みつつ、創作にも手を伸ばし、学内の演奏会にて自作の発表を始めることとなります。そして、1960年に小杉は楽理科の同級生らと、世界的にも極めて早い時期に自由な集団即興演奏に取り組んだ「グループ・音楽」を結成しています。大学卒業後の小杉は「ハイレッド・センター」などの前衛美術グループに関わっていたアーティスト、暗黒舞踏の土方巽ら、飯村隆彦やVAN映画科学研究所に所属していた映像作家たち、そして、現代音楽の演奏家や作曲家たちと交流を深めていき、「反芸術」に代表される1960年代の前衛芸術運動の一端を担うこととなります。それは「音」を超えた「反音楽」としての地平を果敢に切り拓いていくものでした。



1 |



2 |

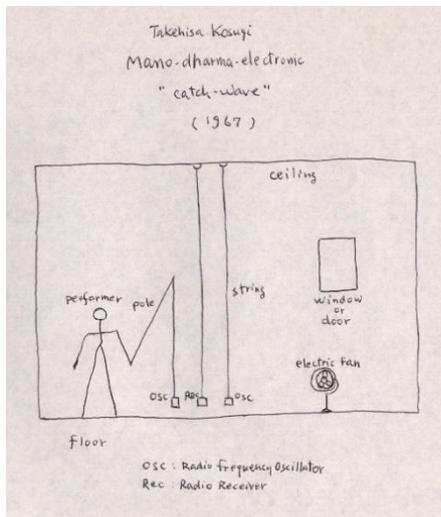
1 |
グループ・音楽「即興音楽と音響オブジェのコンサート」 チラシ (1961年)

2 |
マース・カニングハム舞踊団
神戸公演 リハーサル風景 (1964年)

《第2章》

フルクサスからインターメディアへ(1965~1969年)

小杉のインストラクション作品(言葉による指示をもとにパフォーマーが演奏などの行為をする作品)は早くから海外でも演奏されていました。1964年にはニューヨークを拠点に活動した前衛芸術運動「フルクサス」を率いるジョージ・マチューナスのデザインによって、小杉のインストラクション集が出版されています。1965年に小杉はニューヨークへと渡り、約2年にわたってフルクサス周辺のアーティストたちとも活動します。その中でとくにナムジュン・パイクとチェリストのシャーロット・ムアマンとは密接に交流し、ムアマンの主幹した「ニューヨーク・アバンギャルド・フェスティバル」には3回ほど参加することとなりました。小杉はこのニューヨーク時代に、代表作となる《モノ・ダルマ、エレクトロニック(キャッチ・ウェーブ)》というミクスト・メディア作品を発表します。それは小杉が「音」の世界へと回帰するきっかけともなりました。



3 |



4 |

3 |

《モノ・ダルマ、エレクトロニック(キャッチ・ウェーブ)》 ドローイング (1967年)

4 |

《キャッチ・ウェーブ '68》 舞台風景 (1968年)

《第3章》

タージ・マハル旅行団(1969~1976年)

1969年に小杉は、グラフィック・デザイナー、映像作家、現代音楽の演奏も手がけていたレコード会社のプロデューサー、ニュー・ジャズの演奏家、そして、エレクトロニクスのエンジニアという多彩な出自のメンバーと「タージ・マハル旅行団」という集団即興グループを結成します。このグループの演奏には始まりも終わりもなく、演奏中にメンバーは出入りが自由であり、持ち寄る楽器や演奏などに一切の取り決めがなく、海辺や雪山などでも演奏するといった独自のスタイルによる活動を展開することとなりました。1971年に彼らはストックホルムの近代美術館へ招かれ、壮行会としてロック・フェスティバル形式の大規模なイベントが開催されています。そして、1971年から翌年にかけてタージ・マハル旅行団はヨーロッパの各地で演奏し、メンバーのうち3人はワゴン車に乗ってヨーロッパからインドのタージ・マハルへと向かう「トラベリング・イベント」を敢行しました。



5 |



6 |



7 |

5 |
タージ・マハル旅行団
ピット・イン, ニュー・ジャズ・ホール
(1970年)

6 |
タージ・マハル旅行団
(1971年)

7 |
タージ・マハル旅行団
「Free Rock in Ueno」(1970年)

《第4章》

マース・カニングハム舞踊団(1976年～)

1953年に結成された「マース・カニングハム舞踊団」は、ニューヨークを拠点に2011年まで活動を続けました。1964年にこのコンテンポラリー・ダンスの舞踊団は初めての来日公演を行い、ジョン・ケージやロバート・ラウシェンバーグも同行することとなりました。この時点で小杉は演奏家としてケージらとの共演を果たしており、そして、1977年に小杉はマース・カニングハム舞踊団専属の作曲家／演奏家へと就任します。その後の小杉は、①個人としての作曲・演奏活動、②マース・カニングハム舞踊団からの委嘱による作曲や、同団のために作曲されたケージらの作品の演奏、③美術館や国際アート・フェスティバルなどを舞台としたオーディオ・ビジュアル作品の展示、という三つの柱を中心とした活動を国際的に行っていくこととなります。1995年に小杉はマース・カニングハム舞踊団の音楽監督へと就任し、2011年に解散するまで同団の音楽を率いていくこととなりました。



8 |



9 |

8 |
デイヴィッド・テュードア《レインフォ
レストIV》演奏風景 (2003年)

9 |
横浜トリエンナーレ
演奏風景 (2008年)

《第5章》
[サウンド・インスタレーション\(1963年～\)](#)

小杉は 1960 年代の前衛芸術運動の時代から美術館などを舞台に音の作品を発表しており、その活動が国際的に本格化するのには 1970 年代末以降のこととなります。本展で展示される《マノ・ダルマ, エレクトロニック》では、人間の耳に聞こえない高周波を発する発信機と、ラジオ受信機が天井から吊るされます。演奏家としての扇風機が起こす風や、鑑賞者の動きによって微妙に変化する気流により、発信機と受信機の位置関係は変化し、人間の耳に聞こえる波音のような可聴波が不確定的に生み出されます。展示作品《ライト・ミュージックⅡ》ではソーラー・パネルを電源として、電子音を発する多数のオブジェが机の上に載せられています。観客が机に近づくことによって光は遮られ、オブジェからの電子音は変化を受けます。すなわち、小杉のサウンド・インスタレーション作品は観客が演奏家となって参加できる開かれた作品であり、それは「音楽のピクニック」としての楽しみを与えてくれるでしょう。



10 |



11 |

10 |
 《マノ・ダルマ, エレクトロニック》
 (1967/2015年)

11 |
 《ライト・ミュージックⅡ》
 (2015年)

関連イベント

(1) トークショー

12月23日(土・祝)

14:00- 約1時間

◆要事前申込み

◆応募者多数の場合抽選

高橋悠治(作曲家・ピアニスト) 聞き手:川崎弘二(電子音楽研究)

会 場: 芦屋市立美術博物館 講義室

参加費: 無料(ただし要観覧券)

定 員: 80名

◆12月7日(木)必着で往復はがきに参加希望者全員の氏名(2名まで連名可)、代表者の住所・電話番号と希望のイベント名を明記のうえ当館までお送りください。

(2) 対談

2018年1月13日(土)

14:00- 約1時間

◆要事前申込み

◆応募者多数の場合抽選

小杉武久(音楽家)×藤本由紀夫(アーティスト)

会 場: 芦屋市立美術博物館 講義室

参加費: 無料(ただし要観覧券)

定 員: 80名

◆12月25日(月)必着で往復はがきに参加希望者全員の氏名(2名まで連名可)、代表者の住所・電話番号と希望のイベント名を明記のうえ当館までお送りください。

(3) 上映会

各日 13:30-(開場 13:00) ◆申込み不要、直接会場へお越しください。

会 場: 芦屋市立美術博物館 講義室

参加費: 無料(ただし要観覧券)

定 員: 80名

上映日時	上映予定作品
2018年1月27日(土) ◆プログラム1 「小杉武久 演奏記録」 *約3時間	「朝日ニュース これが音楽だ!」(1961) 「Spectra (video version)」(1992) 「音の世界 新しい夏 芦屋市立美術博物館」(1996) 「二つのコンサート 国立国際美術館」(2009)
2018年1月28日(日) ◆プログラム2 「現代美術とのかかわり」 *約2時間	城之内元晴「ハイレッド・センター シェルター・プラン」(1964) 城之内元晴「Wols」(1964/70s) 中谷芙二子「卵を立てる」(1974)※抜粋 池田龍雄「梵天」(1974) 島袋道浩「小杉武久さんと能登の桶滝に行く」(2013) 島袋道浩「小杉武久さんと能登の見附島に行く」(2013)
2018年2月10日(土) ◆プログラム3 「PR 映画・記録映画・科学映画」 *約2時間	松川八洲雄「ある建築空間」(1964) 北村皆雄「神屋原の馬」(1969) 康浩郎「オープン・スペースを求めて」(1970) 杉山正美「脳と潰瘍」(1971) 杉山正美「スキンカラー」(1974)
2018年2月11日(日) ◆プログラム4 「マース・カニングハム舞踊団」 *約2時間 30分	「スクエアゲーム・ビデオ」(1976) 「ローカル」(1980) 「チェンジング・ステップス」(1989) 「パーク・アベニュー・アーモリー・イベント」(2011)

2017年11月15日現在

◆すべてビデオあるいはDVDによる上映。

◆以上の映画は小杉武久が音楽、演奏、音響などを担当しています。

(4) ギャラリー・トーク

2017年12月16日(土) 講 師: 本展担当学芸員

2018年2月3日(土) 会 場: 芦屋市立美術博物館 展示室

各日 14:00- 参加費: 無料(ただし要観覧券)

◆申込み不要

作家略歴

小杉武久

1938年東京生まれ。東京芸術大学音楽学部楽理科卒。

1960年「グループ・音楽」という日本で最初の集団即興演奏のためのグループを共同結成。60年代初めには、イベント作品が「フルクサス」によって欧米に紹介され、彼らによって演奏される。1965-67年ニューヨークに滞在し、ミクスト・メディアによる作品の制作と共に、ナムジュン・パイクらフルクサスのメンバーと演奏を行う。また、1965年/66年/67年の「ニューヨーク・アヴァンギャルド・フェスティバル」に参加。1969年よりミクスト・メディアによる集団即興演奏を行う「タージ・マハル旅行団」のメンバーとして活動。1971年には、ストックホルムの現代美術館で開催された「ユートピア&ヴィジョンズ 1871-1981」展に参加し、会期中複数回の演奏を行う。その後、1971年から72年にかけて、ヨーロッパ各地でコンサートを開催すると共に、ヨーロッパから中近東を経て、インドのタージ・マハルへ至る「トラベリング・イベント」を遂行した。

この間、1970年に大阪で開催された「日本万国博覧会」の委嘱により、「お祭り広場」のための音楽3作品を作曲した。

1977年、「マース・カニングハム舞踊団」に専属作曲家/演奏家として参加、ジョン・ケージ、デイヴィッド・テュードアらと活動を共にし、1995年から2011年12月のニューヨークでの最終コンサートまでの間、同舞踊団の音楽監督を務めた。

個人としても、様々なフェスティバルでの演奏やコンサートを開催すると共に、サウンド・インスタレーション作品を世界各地のギャラリーや美術館で発表している。

近年では、2015年に個展(アイコン・ギャラリー、イギリス、バーミンガム)、同年、2日間の自作コンサート(ホイットニー美術館、ニューヨーク)、2016年には「あいちトリエンナーレ 2016」(名古屋)の国際展とパフォーマンス・アーツの両部門に参加した。

彼は1966年と1977年に「ロックフェラー三世基金」、1981年「DAAD」(ベルリン)、1994年にはファウンデーション・フォー・コンテンポラリー・アーツから「ジョン・ケージ・アワード・フォー・ミュージック」を受賞している。

関連イベント講師

高橋悠治

作曲・演奏とフリーの即興
1960年草月アートセンター
1974-76年季刊誌「トランソニック」
1978-85年「水牛楽団」「水牛通信」
<http://www.suigyuu.com/yuji/>

《高橋 著書》
「高橋悠治／コレクション
1970年代」
「音の静寂 静寂の音」
(平凡社)
「きっかけの音楽」「カフカ
ノート」(みすず書房)

藤本由紀夫

サウンドアーティスト。大阪在住。大阪芸術大学音楽学科卒。80年代半ばより日常のなかの「音」に着目した装置、サウンド・オブジェを制作。インスタレーションやパフォーマンス、ワークショップを通じて、空間における「音」の体験から新たな認識へと開かれていくような活動を展開している。

主な個展に1997年から2006年まで10年間毎年1日のみ開催された展覧会「美術館の遠足」(西宮市大谷記念美術館 / 兵庫)、2001年「四次元の読書」(CCGA 現代グラフィックアートセンター / 福島)、2006年「ここ、そして、そこ」(名古屋市美術館 / 愛知)、2007年「ECHO - 潜在的音響」(広島市現代美術館 / 広島)、「哲学的玩具」(西宮市大谷記念美術館 / 兵庫)、「+/-」(国立国際美術館 / 大阪)、「関係」(和歌山県立近代美術館)など。主なグループ展に2001年「第49回ヴェニス・ビエンナーレ」、2007年「第52回ヴェニス・ビエンナーレ」(ヴェニス)など。

川崎弘二

1970年大阪生まれ。2006年に「日本の電子音楽」、09年に同書の増補改訂版(以上 愛育社)、11年に「黛敏郎の電子音楽」、12年に「篠原眞の電子音楽」、13年に「日本の電子音楽 続 インタビュー編」(以上 engine books)を上梓。CD「NHK 現代の音楽 アーカイブシリーズ」(ナクソス・ジャパン)における黛敏郎、湯浅譲二、松平頼暁、林光、石井眞木、一柳慧、実験工房の解説をそれぞれ執筆(2011~13年)。2011年から雑誌「アルテス」にて「武満徹の電子音楽」を連載(2015年まで)。2014年にNHK Eテレ「スコラ 坂本龍一 音楽の学校 電子音楽編」に小沼純一、三輪眞弘と出演。<http://kojiks.sakura.ne.jp/>

お問合せ先

芦屋市立美術博物館
〒659-0052
兵庫県芦屋市伊勢町12-25
<http://ashiya-museum.jp>

企画内容に関して

本展担当学芸員:大槻晃実
TEL:0797-23-2666 (学芸直通)

画像貸出など広報について

担当:総務課
TEL:0797-38-5432 (代表)